
誰が為

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰が為

【Nコード】
N1719V

【作者名】
三嶋文絵

【あらすじ】
妹が事故に遭った。面会謝絶のドアの前で、少女たちは妹の友人に出会う。話を聞きたいと、少年は言った。外部サイト「みくり」掲載作品です。

（前書き）

「voice」からの連作の4本目です。併せてお読みいただけると嬉しいです。

自然、大股の早足になる。追ってくる姉のはらはらした気配が感じ取れて苛立たい。何よ。何か悪いわけ。

靴音高く階段を上がって、端から五つ目の病室のドアの前に立ち止まると同時、掌ほどある開閉ボタンをばしんと叩く。途端にボタンは薄赤く光って、上のディスプレイがメッセージを表示する。見なくたってわかる。『入室は制限されています』。――まだか！

「駄目？」

追いついた姉が訊くまでもないことを訊く。入れるならボタンは緑に光ってドアは開いているはずだ。

触れ方が荒くて指紋掌紋が読み取れなかった、なんてことはない。今時個人の家にだってそんな低機能は設置しない。ここにいるのがあたしだとわかった上で、入れるのはごめんだと言っているのである。

同じ門前払いでも、最初は『医療関係者以外の立ち入りを禁じます』だった。それはしょうがない。中では患者が生死の境を彷徨っていたのだから。そこから一段階緩いのが現状だ。入室制限。逆に言えば、人によっては入ってもいいということ。近づく人によって悪化したりしなかったりする容態なんてあるのかしらね！

明日香――この病室の患者は、つい数日前に交通事故に遭った。医療関係者以外の立ち入りが可能になったということは、どうにか一命は取り留めたということ。制限つきだということは、安心とはまだまだ言えないということ。そういう段階の患者の病室には、友人というだけではあまり入れてもらえない。恋人となると病院次第らしい。婚約者なら可能性は高まる。いわゆる家族には、ほぼ確実に許可される。

明日香は、あたしには妹だ。あたしは患者の姉になる。但し腹違いの。とはいえ同じ腹違いでも、一緒に暮らしてきた兄たちは入れ

るはずだ。あたしや姉が入れないのは母親が違うせいではなく、父と母が結婚も同居も一度もしなかったことによる。

結婚しない事実上の夫婦は、多数派ではないが珍しくもない。結婚すれば同居の義務が生じる。同居しなければライフスタイルを擦り合わせる必要がない。その代わり互いを独占してもおけない。父は母でない人と二回結婚した。あたしや姉という子供が母との間にありながら。こちらは珍しいかもしれない。

母には覚悟があつたろう。父の先妻が死んだときに後妻に入らず、再婚という父の選択肢を潰しておかなかったからには。兄たちは『先妻の息子』、妹の明日香は『後妻の娘』なのに、おかげであたしたちは今も昔も変わらずに『愛人の娘』だ。

片親なのは大したことじゃない。未婚も離婚も再婚も数多い現在、そんなのはざらだし知り合いにも大勢いる。腹違いの兄弟だって特別な存在じゃない。——その兄弟から敵視されたり、その兄弟と差別されたりする筋合いはない。

「不公平だわ」

兄たちはよくてあたしたちはいけないなんて納得行かない。家族って何よ。同居が何だっていうわけ。一緒に暮らしてるからって、仲がいいとも大事にしてるとも、近づけて安全な人間だとも限らないじゃないの。

「でも、どっちにしても、あのとくに初めて会ったんじゃない。一回会っただけじゃ」

「そういうことじゃないのっ」

あたしたちが入れないことじゃなくて、なのにあの人たちは入れることが気に食わないのよあたしは。

そこで言葉を切ったのは、姉に向き直ったところで、その後方、階段の近くに人の姿をみつけたからだ。周りを気にして黙りこくるのも馬鹿馬鹿しいけど、喚いているのを好き好んで人に見られたいわけでもない。

あたしの視線に気づいて姉も振り返った。廊下をこちらへ歩いて

くるのは一人の少年だった。明日香と同年ぐらいの、と見て取ったそのときに目が合った。少年は反射のようにうつすらと笑みを浮かべた。

「明日香の——お姉さん？」

数歩の距離で立ち止まる。

「だったら？」

「明日香が喜びます」

その返事が何を示すかあたしは考えた。あたしたち姉妹の関係をわかっているのであるということ。恐らくは明日香と、その事情を知りうるような仲であること。

「まだ会えませんか？」

「ええ。他人はお呼びじゃないって」

「また」

あたしの尖った声も姉の困った声もよそにドアに近づき、開閉ボタンに掌をそつと押し当てる。ボタンは拒絶の色に光った。一応試しただけなのだろう、落胆するでもなく少年は肩を竦めた。

「お兄さんたちや小母さんたちが来るときを狙うことにします」

「あら、いいんだ。あたしたちは寧ろ避けなきゃいけないのに」

厳密に言えば、制限されているのはドアを開けることだ。病室に入ることにしない。開けられる誰かが開けたときに、一緒に入る分には差し支えない。

だからって兄たちに入れてもらうなんてごめんだ。向こうだってお断りだろうけど。

諦めよく立ち去ろうとして、ふと少年は足を止めた。

「お時間あったら、いいですか？」

友達です、と少年はかなり手を抜いた自己紹介をした。

「あのとき、明日香に付き合って、僕もこっちに来てたんですよ。どこに行ってたかもし訊かれたら、僕と出かけたって言えるように」

その二人で出かけることには釈明はいらないらしい。

病院の食堂で出てくるものは、食べ物も飲み物も安くて健康的だ。味が薄くて美味しくない。あたしは両手で何となくコップを包み込むようにしていた。

あたしたちと明日香とはつい最近まで、同居どころか同席すらしたことがなかった。兄たちとはそうではなかったから、明日香の母親が避けていたのかもしれない。唯一の実子と夫の庶子との接触を引いては交流を。

だから明日香はこっそり会いに来た。スクールからの帰り道で待ち構えていた。あたしたちを見分けて呼び止め、妹です、と自信ありげに名乗った。人違いの可能性なんて考えてもいないかのように、行事の振り替えてスクールが休みで、家族に気づかれずに来られる絶好の機会だったと明日香は言った。あたしと姉はスクールを出たところでたまたま合流して一緒にいた。誰かにお膳立てされたみたいだと思ったらちよつと癪だったけど、ゆつくり喋ろうということになって、近くの小さな公園に場所を移した。

一言で言うなら、気に入った。異母兄たちと違って。あたしたちとは初対面なのに、異母兄たちとは普通の兄妹らしく暮らしていることが悔しかった。

「また来ていい？」

はねつけられる可能性なんて、やっぱり考えてもいなかっただろう。帰る時間だとベンチから立ち上がって、そう訊いたときも確信に満ちていた。

「勿論よ」

「えー？」

姉の答えとあたしの返事が重なって、ぎょつとしたのは姉だけだった。明日香は騙されずににやつとし、じゃあ勝手に来るね、と言った。

そして、その後。ステーションまで送っていく途中。靴紐の端を踏みつけて、ちよつと遅れて。ほどけたのを結び直して。何歩か離れたあたしたちに、軽い駆け足で近づこうとして。

——自動車のいらぬ助けを借りて、明日香は軽やかに宙を舞った。
遙か昔のことのような気がする。

「駅前の喫茶店で待つてたんですけど。……全然気がつかなくて。
サイレンも聞こえてたのに。話弾んでるんだろうな、とか思ってた」
鈍いでしょうと自嘲するように、少年は薄い笑みを浮かべた。知
人の戻りが遅いところに救急車のサイレンが聞こえたからといって、
すぐにその二つを結びつけるのもどうかと思うけど。

事故のことを知ったのは、結局随分後になってからだったらしい。
「何かあったら僕がフォローしてやらなきゃいけなかったのに。お
兄さんたちにはできれば知られたくなかったと思うんです。悪いこ
とじゃないんだから構わないとは言ってたけど」

「そうよ。あの人たちの許可がいるようなことじゃないわ」

「あんまりそういうこと言わないでよ……人前で」

最後の一言を姉は小さく付け加えた。誰も聞いてやしないわよ、
気が小さいんだから。

何が微笑ましいのか、少年は表情を和らげた。

「——お姉さん。明日香は、どうでした？」

問いの意味を取りかねて、あたしは眉を寄せた。

「はきはきしてた？ 生意気だった？ それとも」

ああ、そういうこと。

「いい子だったわ。あたし、好きよ」

「わたしも」

遮って言えば、姉も続いた。よかった、とばかり少年は笑む。嬉
しそうに。

「突っ込んだこと訊くんですけど、っていうか訊きますけど。お
兄さんたちに、会いました？」

「なんで？」

「明日香が知りたいだろうから」

……訊くまでもなかったか。

「明日香が目を覚ます頃には、きっとみんな取り繕えるぐらい落ち

着いてる。心配だったよとか助かってよかったとか、それらしい顔して言える。けど、明日香は本音を知りたいはずなんだ」

笑みを消して真面目な表情になる。

的確なのか的外れなのか、あたしにはわからない。が、あたしよりもこの少年の方が、明日香との付き合いが長いのは確かだ。だから一応、想像は当たっていると考えるとする——つまり。

兄たちがそれらしい顔をして、明日香の快復を喜んでみせても、明日香は鵜呑みにしないだろうと。

元々がそういう性格、思考回路なのかもしれない。けれどもあるいは、相手が兄たちだからかもしれないわけで。

後者だといったと思った。

「二度とないのに、こんな機会。あっちゃたまらないけど。今の兄さんたちの様子、明日香は知りたいと思うんです」

「あんたが聞いたいて、教えるってこと？」

「お姉さんたちに会いに行ったこと、隠してやれなかったんで」
肩を竦める。

「それぐらいやんなきゃ、合わせる顔がない」

疑ってないんだ、助かることは。

下世話な好奇心じゃない。明日香が知りたいことを知らせてやるために。

口実だという可能性はある。明日香のためと言いながら、本当は自分の興味だという可能性はある。が、少年はとても自然で、信じるのに抵抗を感じなかった。

「悪いけど、会ってはないんだ」

だから、あたしはそう答えた。教えてやる約束も義理もないんだから、謝る必要は本当はない。ただ、応えられるなら、応えてやりたくなったので。

「でも、代わりにおもしろいの見せたげる」

モバイルを取り出す。病院内でのモバイルの使用は基本的に禁止だけれど、見舞い客も多く出入りするこの食堂は例外ゾーンだ。

着信履歴を表示して渡した。少年が軽く目を瞠って、思惑通りとあたしは笑んだ。

「どう？」

「事故の、次の日」

その通り、事故の次の日だ。とある一つの番号から、何度も何度も何度も着信があったのは。

兄なの、と教えた。番号を入れてはあるけれど、モバイルを通してまで話さなきゃいけない用事も、話すつもりもさらさらない。頭から着信拒否対象である。そのことは向こうだって知っている。繋がらないことがわかっていて、それでも履歴は残ることをわかっていて、これだけかけてきたということは。

「あたしたちのせいだとも言いたいのかしらね」

あたしたちのところに来て、明日香が事故に遭ったから。怒鳴るように。責めているように。そういう意味じゃなければ、何だ。

大体こっちから呼んだわけじゃない。来たのは明日香の勝手だ。あたしたちが責められる謂れはない。そんなこともわかってない。

画面をじっとみつめて、興味深いな、と少年は呟いた。

「また何かあったら教えるよ」

「ありがとうございます」

モバイルを閉じて返した、そのまなざしは真剣だったが、口許は笑みを作っている。隣の姉だけがおろおろしたような顔をしていた。

自然、大股の早足になる。追ってくる姉のはらはらした気配が感じ取れて苛立たい。

靴音高く階段を上がって、端から五つ目の病室のドアの前に立ち止まると同時、掌ほどある開閉ボタンをばしんと叩く。途端にボタンは薄緑に光って——シュン、と音を立ててドアが開いた。

予定外の動作に固まる。

「入れるの？」

追いついた姉が訊くまでもないことを訊く。現に開いてるじゃないの。開く以上はメッセージも出ない。……あ、そ。入れるの。

出端をくじかれた気分だった。いや、それはおかしい。そういう気分になるのは入れなかったときであるべきだ。あたしは明日香を見舞うために来たんだから。——兄たちへの不満の種を集めるためじゃ、ない。

と、あたしの横をすり抜けて、姉が病室へ飛び込んでいった。実際には飛び込むと言えるほどの歩調ではなかったが、本当は駆け寄りたいことがわかるような早足で。

……あたしだって、ちゃんと心配してるわ。

顎を上げて、あたしは続いた。シュンと後ろでドアが閉まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1719v/>

誰が為

2011年8月21日03時16分発行